慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析： 文章完成法テスト(SCT)を用いて：(4)
Sub Title	A study on apprehensibility of personality types through SCT
Author	曽野, 佐紀子(Sono, Sakiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1969
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.9 (1969.) ,p.41- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000009-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析

——文章完成法テスト（SCT）を用いて——(4)

A Study on Apprehensibility of Personality Types through SCT

曽　野　佐　紀　子

Sakiko Sono

私達はよく日常の話などで，「あの人は頭がよく，趣味も豊かな人だ」とか，また「あの人は非常に行動的な人だ」などといって，その人らしい見方で，他の人をみているものである。しかもこのような印象が，多くの人の間でかなり一致していることを，私達はよく経験しているようである。

さて，他者のパーソナリティを把握するに当たって，エキスパートの判断は，文章完成法テスト(SCT)を用いた場合，かなり一致している(Indow et al., 1962)。それではエキスパートでない場合，一般に他者のパーソナリティをどのように把握しているのであろうか。本研究ではその把握のされ方の現象を分析していきたい。

ところで，他者のパーソナリティの把握に関しては，従来，他者の情動からそのパーソナリティを知覚していこうとする考え方や，容貌によるパーソナリティの知覚という扱い方[1]や，あるいはまた stimulus person についてのきわめて少量の言語的情報から，それをどのように利用して彼についての印象を作りあげていくかということをとりあげている方向その他がある (Ash, 1946; 大橋, 1960; Tagiuri & Petrullo (Eds), 1958)。

本研究では，他者 (stimulus person) についての情報として，他者が書いた SCT[2]（佐野，1965；佐野・槙田，1960，1968）が用いられた。従ってかなり多くの言語的情報が得られることになる。SCT を刺激に選んだ理由のひとつは，印東・佐野等（1962）の研究により，stimulus person として客観性のあるものを用いることができたからである。

パーソナリティの把握の仕方は，横断的方向と発達的方向の二つに大別される。佐野（1965）によれば，横断的方向とは「パーソナリティの内容」と考えられるもののなかで，どのような面をおさえておけば，まちがいなくパーソナリティを捉え得るかという方向である。ここでとりあげられている「パーソナリティの内容」は，能力，情意，指向，力動の四つの側面である。能力的側面は，知的作業の能率といわれる面と，精神的分化〔Differentiation (Witkin et al., 1962)〕と呼ばれるものとの二つから考えられている。情意的側面とはいわゆる気質のことで，S(Schizothymic), Z(Cyclothymic), E (Epileptic) の三つの性格類型が考慮されている。力動的側面は，一口でいうとその人の住んでいる心理的世界の安定度といわれる面である。ヒステリィ的傾向 (H) と，神経質的傾向（N）の二つが考えられている。更にHを未成熟 (Immature) なものと顕耀欲 (Geltung) と呼ばれるものにわけている。

本研究では，以上のパーソナリティの特性から，Differentiation(D)，S，Z，E，H の五つをとりだして，その組合せによる12のパーソナリティ・タイプを考えることにした（第1表）。例えば，D+SH− は，精神的分化の程度が高く，性格類型はSで，ヒステリィ的傾向は認められないというタイプのパーソナリティを表わす。以下これらのパーソナリティ・タイプがどのように把握されるかを検討していきたい。わかりやすいタイプもあれば，把握しにくいタイプもあろう。特性の一つが目立つと，他の特性がゆがめられることもあろう。そのような判断現象を吟味するために以下のデザインがくまれた（曾野，1966；佐野・曾野，1966）。

方　　法

被験者 (Ss) 482名 (男294名，女188名)。実際に分析に用いられたのは476名。

刺激　他者の書いた SCT 事例を刺激として用いた。第1表に示されているような12のパーソナリティ・タイプにきわめてよく当てはまると思われる SCT 事例が選ばれた。選択の基準は，主としてその SCT 事例に対し9人のエスパートの診断が一致したものとした (Indow et al., 1962)。以下に事例番号 1 (D+SH−) に当たる刺激の最初の部分を例示しておく。

第1表　刺激 (他者の書いた SCT 事例) として用いられた12のパーソナリティ・タイプ

事例番号	パーソナリティ・タイプ
1	D+SH−
2	D−SH−
3	D+SH+
4	D−SH+
5	D+ZH−
6	D−ZH−
7	D+ZH+
8	D−ZH+
9	D+EH−
10	D−EH−
11	D+EH+
12	D−EH+

事例 1　　男　23才2カ月 (原文のまま)

Part I

1　**子供の頃，私は**　よく病気をして父母に随分心配をかけたそうです。

2　**私はよく人から**　とりつきにくいと言われますが，別に気にはなりません。

3　**家の暮し**　には満足しています，とりたてて，いうことはありません。

4　**私の失敗**　の原因はほとんどが意志の弱さから生じているように思います。

5　**家の人は私を**　非常に信頼しているようです，それだけに責任も感じますがうれしいことだと思っています。

6　**私が得意になるのは**　父母の前だけです。他人の前では出来るだけ得意になるのはよそうと心掛けています。

7　**争い**　ごとほどきらいなものはありません。自分の感情はころしてもすべてがまるくおさまるように努めています。

8　**私が知りたいことは**　人間の精神とか，性格とか，意識とか，いうものがどのようにして，何によって決定されてゆくのだろうかということです。

9　**私の父**　はよき相談相手です，重大なことでも相談したことであれば確信をもって行動することが出来ます。

10　**私がきらいなのは**　人の立場をよく理解しない人です。

(以下略)

判断方法　Ss は以上の基準で選ばれた SCT 事例を読み，それを書いた人がどのようなパーソナリティの人であるかを判断する。1名につき2例の SCT が与えられ，順序の効果がないようにデザインされた。従って判断数は全体で 952 となった。質問用紙に，2 種の判断の仕方〔A〕〔B〕を，実験者側で用意した。本稿では，〔B〕の分析結果に限定したいので，〔A〕(曾野，1966；曾野・佐野，1969) については，ここではふれない。〔B〕は，他者のパーソナリティを，total personality としてどの程度把握することができるかを吟味するために考案されたものである。〔B〕に対する教示は大体次のようなものである。

"今，読んでいただいている文章完成法テスト (SCT) から，これを書いた人は，どんな性格 (パーソナリティ) の人かということを，できるだけ想像してみていただきたいのです。この人はきっと頭がよいだろうとか，この人はおっとりしている人なのだろう，というふうに思いうかべてみて下さい。一つ一つの言葉にとらわれることなく，60の文章を全部読んだあとにでてくる全体的な印象をつくりあげて下さい。……この紙をめくると，いろいろな人のパーソナリティをスケッチ風に記述したものが並んでいます。それをよく読んで，それぞれについて，できるだけどういうタイプの人かということを思いうかべてみて下さい。12通りのスケッチが並んでいます。次に今読んでいただいた文章完成法テストを書いた人が，12通りあげてあるパーソナリティのスケッチのうち，どれに一番似ているかを考えてみて下さい。"

12通りのスケッチを，以下に示しておく。なお，スケッチの番号は，1から順に，D+ZH−，D−SH−，D+

EH+，D−SH+，D+ZH+，D−EH−，D+SH+，D−EH+，D+SH−，D−ZH+，D+EH−，D−ZH−のパーソナリティ・タイプに対応する。

1　人に親しまれるような暖かさをもっており，朗らかで頭の回転も早く，先の見とおしもきく。また決断するのも早く，行動的であり，抱擁力もあって，自然に人から推されてリーダーになるような人。考えるというよりは行動に生きているタイプ。

2　ボサッとしていて何を考えているのかつかみどころがない。無口の方で，人と積極的に話すこともない。内面生活にもとぼしく，何となく日を送っているという感じがする。人からグズだといわれるのが当たっているようなところがある。

3　何ごとかをやろうという執念を持っている。馬力もあるし，スタミナもある。また先をみる頭もある方であり，たくましいものを持っているが，他人を踏台にして自分のプラスを得ようとするところがある。権力に対する憧れがあり，仕事もできる人ではあるが，鼻につくようないやらしさ，策士のようなぬけ目なさを持っていて，人に嫌われる面もある。

4　内面的世界は，それ程ある方ではなく，頭も良い方ではない。協調性も乏しく，エネルギーもない方である。夢みたいな華美な表現が好きでセンチメンタリストみたいなところもある。全体的には未成熟で自己中心的なところがある。自分に対する見方は甘い方である。内的状態も，少し安定を欠いている方である。

5　いつも「大将」になっていないと気のすまいところがある。先をみたり，みんなを引っ張っていくという点では強引なところもあるが，「長」としては有能な方である。ただやりすぎをしたり威勢のよいところがありすぎて，周囲の人から敬遠されるようなこともある。（次から次へといろいろなことをやりちらかすこともある。）

6　単純な世界に住んでいて，平常は牛のようにのっそりしているが，何かでカッとなることもある。生真面目でムッツリしていて粘り強い。のみこみは遅く融通もきかない方である。一度思い込むと執念深いところもある。

7　鋭い皮肉をいって人の痛いところをついたり，ピリピリした感じで近づきがたいものをもっていたりする。頭はよく，先もよく見える方で，「長」になりたがるところがあるが，みんなを抱擁していくだけの人間的な巾を持っていない。冷たいとかお高いとかよくいわれる。ある距離をおいて接していると，ユニークな人であるが，一緒に暮らすと針のムシロに坐っているような感じにさせるタイプである。

8　口をひらけば，オレがオレがと自分の偉さの押売りをするところがある。聞いている人の気持などはわからない。頑固なところがあり，話をしていてひっかかるところが多く，いやな奴だという感じがする。カッとなると自分を止めることができない。他人の気持はわからず無神経なところがある。

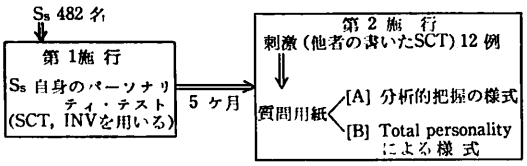
9　鋭い感じのする人であるが，表面的にはあまり自分をだしたがらない。その人らしいユニークな雰囲気を持っており内面的世界も豊かである。自然や孤独を愛するところがある。客観的に物事をみられる方であり自分のこともよくみつめている。表面的には静かだが厳しさを持っている。

10　オッチョコチョイで，よくおだてにのりスタンドプレイを平気でやる。ピエロだといわれていても気がつかないで，自分がよく思われていると思っている。悪気はないのだけれど，他人の噂話などをまいて歩く方である。

11　頭がきれるとか鋭いという方ではないが，それなりの世界を持ち，危なげなく手がたいやり方をする。落つきもあるし，なかなかの努力家であり粘り強くやる。社会的常識にも富み礼儀もわきまえている。ユニークなものの見方はあまりしないが社会的通念をよく心得ていて，キチンとした生き方をしている。このような意味で人に信頼される人である。しかし多少，杓子定規的なところもあるし，また，変化にすばやく順応できないところもある。

12　人はよいのだが，とにかく早のみ込みでオッチョコチョイである。先のことを考えず行動のみの単純な世界に住んでいる。頼まれると調子よく引受けるが，そのうち忘れてしまうところがある。

手続き　第1図にその要約を示した。第1施行では，Ss は自ら SCT 及び INV（佐野他，1960）をうけている。これは，本来はこの実験デザインのなかでの，さらに別の目的でなされたものであるが（佐野・曾野，1966；曾野，1966；曾野・佐野，1969），自分で SCT を書いた



第1図　実 験 手 続 き

という経験が，第2施行で刺激として与えられる SCT に，少しは慣れているという利点がある。

結　　果

本研究の結果として，まずはじめに得られるのが，第2表である。この表から，例えば，D+SH+ の SCT 事

第2表　12のパーソナリティ・タイプ（刺激）にたいする判断として得られた 12×12 の confusion matrix (D×T×H)

x \ y	D+ SH+	D+ SH−	D+ ZH+	D+ ZH−	D+ EH+	D+ EH−	D− SH+	D− SH−	D− ZH+	D− ZH−	D− EH+	D− EH−	計
D+SH+	27	35	0	2	4	3	8	0	0	0	4	0	83
D+SH−	4	14	1	1	1	41	8	3	0	0	0	4	77
D+ZH+	0	22	0	15	2	29	10	0	3	7	0	1	89
D+ZH−	0	1	4	27	1	5	5	0	5	26	0	0	74
D+EH+	19	20	2	2	11	12	3	5	1	0	5	1	81
D+EH−	1	24	0	10	4	28	2	0	0	0	0	1	70
D−SH+	2	12	1	2	3	6	37	0	2	2	4	0	71
D−SH−	0	2	0	0	0	8	22	38	1	7	0	2	80
D−ZH+	12	9	2	9	1	6	17	4	3	13	1	1	78
D−ZH−	0	1	0	10	2	6	11	0	16	39	0	0	85
D−EH+	3	16	0	3	2	32	9	6	0	0	1	2	74
D−EH−	5	30	1	0	7	24	14	0	0	1	4	4	90
計	73	186	11	81	38	200	146	56	31	95	19	16	952

第3表　12×12 の confusion matrix を縮小して得られた4つの例

D × T

x \ y	D+S	D+Z	D+E	D−S	D−Z	D−E	計
D+S	80	4	49	19	0	8	160
D+Z	23	46	37	15	41	1	163
D+E	64	14	55	10	1	7	151
D−S	16	3	17	97	12	6	151
D−Z	22	21	15	32	71	2	163
D−E	54	4	65	29	1	11	164
計	259	92	238	202	126	35	952

D

x \ y	D+	D−	計
D+	372	102	474
D−-	217	261	478
計	589	363	952

T × D

x \ y	D+S	D−S	D+Z	D−Z	D+E	D−E	計
D+S	80	19	4	0	49	8	160
D−S	16	97	3	12	17	6	151
D+Z	23	15	46	41	37	1	163
D−Z	22	32	21	71	15	2	163
D+E	64	10	14	1	55	7	151
D−E	54	29	4	1	65	11	164
計	259	202	92	126	238	35	952

T

x \ y	S	Z	E	計
S	212	19	80	311
Z	92	179	55	326
E	157	20	138	315
計	461	218	273	952

第4表　7つの confusion matrices の伝達情報量に関する測度（単位は bit）と，articulation score (P) 及び I ($=H_t/H_x$)

	D×T×H (T×H×D / H×D×T)	D×T (T×D)	T×H (H×T)	D×H (H×D)	T	D	H
size	12×12	6×6	6×6	4×4	3×3	2×2	2×2
H_x	3.580	2.584	2.584	1.997	1.585	1.000	1.000
H_y	3.139	2.373	2.368	1.794	1.510	0.959	0.919
H_t	0.769	0.424	0.376	0.147	0.233	0.086	0.023
P	0.241	0.378	0.333	0.400	0.556	0.665	0.584
I	0.215	0.164	0.146	0.074	0.147	0.086	0.023

例（刺激）を読み，それを D+SH+ だと判断したのは83例中27例であったことがわかる。総計952例に対する対角線上の数の比（P）を計算すると，0.241 になる（第4表）。これは刺激を正しく判断したものの全体に対する割合を表わしている。

さて，第2表はいわゆる confusion matrix と呼ばれているものである。その分析に当たっては，従来，articulation score，伝達情報量 (H_t) 等が一般に広く用いられている (Garner & Hake, 1951; Quastler, 1955; Attneave, 1959; Ciarke, 1960; Bieri et al., 1966)。Pは，confusion matrix では articulation score としばしば呼ばれている。第2表から H_t を計算すると，0.769 bits になる（第4表）。

第2表は12×12の confusion matrix であるが，パーソナリティ特性のいずれかをとりだして，その特性にのみ着目することによって，matrix のサイズを縮小することができる。第2表はD，T及びHの三つの特性を考慮したものであった (D×T×H)。例えばDのみをとりだして，D+がD+であるとどの程度正しく判断されるかということに着目すれば，第2表は第3表，Dのように縮小することができる。

第5表　サイズの異なる confusion matrices の H_t を比較するために用いられた I*

比較された2つの matrices	I*
D⟶ D×H	.058
H⟶ H×D	.113
D⟶ D×T	.197
T⟶ T×D	.174
H⟶ H×T	.209
T⟶ T×H	.124
D⟶D×T×H	.249
T⟶T×H×D	.242
H⟶H×D×T	.273

第6表　9つの confusion matrices における $\overline{H}_t$ と $\overline{I}$

	$\overline{H}_t$ (単位 bit)	$\overline{I}$
D×H	.049	.050
H×D	.076	.076
D×T	.232	.158
T×D	.112	.115
H×T	.300	.191
T×H	.052	.059
D×T×H	.540	.221
T×H×D	.334	.182
H×D×T	.582	.231

同様にして，T（第3表，T），H，D×H，D×T（第3表，D×T），T×H のそれぞれ縮小された confusion matrix を得ることができる。第4表にはこのようにしてできた7つの confusion matrices に対する P 及び H_t の値が示されている。Indow & Sono (in press) によれば，H_t を比較するには，指標 I ($=H_t/H_x$) がのぞましく，また matrix のサイズが大きくなるに従って，H_t の値も大きくなるので，サイズの異っている confusion matrix の H_t を比較するには，指標 I* を用いるのがのぞましい。なお I* は，H'_t をサイズの大きい方の matrix の H_t とすれば，

$$I^* \doteq \frac{H'_t - H_t}{\max.\max H'_t - H_t}$$

によって求めることができる。

計算の結果は第5表に示されている。更に，指標 $\overline{H}_t$

及び $\bar{I}$ が計算された（第6表）。それらは，

$$\bar{H}_t=\sum_i\sum_j p(i,\ j)\ H_t(i,\ j)$$

$$\bar{I}=\sum_i\sum_j p(i,\ j)\ I(i,\ j)$$

によって求められた。[3)]

H_t の値は，例えば matrix，D×T と T×D（第3表，D×T 及び T×D）とでは同じであるが（第4表），I*，$\bar{H}_t$ 及び $\bar{I}$ の値では D×T と T×D とで異ってくる。従ってこれらの指標については，第5表及び第6表に示された通り，9つの confusion matrices を考慮しなければならない。例えば，第5表の I*（D→D×T）＝0.197 及び I*（T→T×D）＝0.174 は，Dに加えられたTの方が，Tに加えられたDより把握のされ方が大きいことを表わす。つまりDに加えられたTによる増分の方が大きいことを表わしている。それは $\bar{I}$(D×T)＝0.158 及び $\bar{I}$（T×D）＝0.115（第6表）によっても，支持されている。なお例えば，$\bar{I}$（D×T）は，D の判断が決まったうえでの，Tの把握の集中の程度を表わす。

考　　察

H_t をもとにした種々の指標の値から，考察をすすめるに当たっては，常にPと合わせ考えることによって結果を論じなければならない。何故なら H_t はあくまで判断が集中する度合であって，対角線上に集中する度合を表わすとは限らないからである。以下の考察は，従って常にPを念頭においていることを，ここで強調しておきたい。

まず，D と H の判断のされ方について検討してみよう。DとHは，2×2 の同じサイズの matrices であるから，Iによる比較が可能であり，DがHより判断が集中することがうかがえる（第4表）。同様の傾向が I*(D→D×H)<I*(H→H×D)，及び I*(T→T×H)<I*(T→T×D) からも推察される（第5表）。更に $\bar{I}$(H×D)>$\bar{I}$(D×H)，及び $\bar{I}$(T×D)>$\bar{I}$(T×H) によっても同じ傾向が支持されている（第6表）。一方，D及び H の matrices のPを比較すると，やはりDがHより大である。従って，DとHではDの方がより正しく把握される傾向があるといって差支えないであろう。これは佐野等の仮説と一致しているところである。

次に D と T の比較をすると，I*(D→D×T)>I*(T→T×D)，I*(H→H×T)>I*(H→H×D)，$\bar{I}$(D×T)>$\bar{I}$(T×D)，$\bar{I}$(H×T)>$\bar{I}$(H×D) 等から，D よりTに対する判断がより集中しているといえる。一方Pでは，DとTの matrices のサイズが異なるので，第4表のPをそのまま比較することはできないが，適当な修正を加えると，やはりDよりTが大きくなる。佐野等は，TよりDの方が把握されやすいと述べているが，ここでは逆の結果となり，今後の課題として興味深いことのように思われる。

次にTのなかの個々の類型についてみると，Zが最も把握されやすく，またEに対する判断はEとSに二分されそのどちらかにきめがたいもののようである（第3表，T及び曾野，1966）。TとDの関係ではZはDが低くみられやすい傾向が目立っている（第3表，T×D）。更に，D×H の matrix のサイズは4×4 であり，Tのそれは3×3であるから，I の値は，D×H の方がTより大きくなる筈である。ところが，結果は逆になっている（第4表）。このことはTがかなり把握されやすいことを物語っているように思われる。以上から T，D，H の順で，正しく把握されるといってよいようである。

次に，D×T と T×H を比較してみよう。この二つの matrices のサイズは同じであるから，I で比較することが可能である。第4表に示されているように，I 及びP共に D×T の方が大である。これは以上述べてきた結果と同じ方向を示すもので，刺激にHが入ると正しい把握が困難になるといえる。つまり，他者のパーソナリティにHがあると，そのパーソナリティを正しく把握できないようである。このようなことは現実にしばしば起こっており，佐野等の体験上の印象と一致している。Hが最もわかりにくい特性であることは，以上で明らかになったが，その誤りの方向に一貫性があるかどうかが更に詳細に分析された（曾野，1966）。一口でいうと，（H＋D－）のパーソナリティ・タイプは（H－D＋）として把握されやすいという傾向がみられた。つまり，HとDは混同されやすい場合があるといえる。誤りの方向に特定の傾向があるか否かは，P と H_t を比較検討することによっても，知ることができる。もし H_t が大きくて（但し abs. max $H_t=H_\pi$），Pが小さければ，その判断は，正しくはないがどこかに集中していると考えて差支えないと思われる。サイズの異なる matrix のP及び H_t を比較する場合には，それぞれ適当な修正を施こさねばならないのはいうまでもないことである。

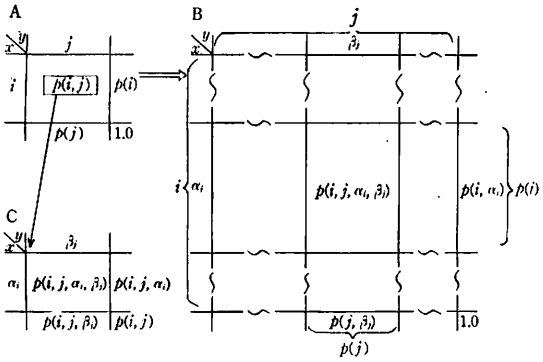
以上は，さきに述べたように他者のパーソナリティを total personality としてどのように把握するかという様式〔B〕によってなされた実験の結果である。分析的把握の様式〔A〕による結果からも〔B〕と同じ方向が支持されている（曾野，1966）。

註

1) stimulus person の顔写真から，そのパーソナリティがどのように把握されるかというテーマを2年前から扱い，現在のところかなり positive な結果がでている（槙田，佐野，櫃田，曽野）。

2) SCT には，全部で60の書きかけの文章が並んでいる。例えば，"子供の頃，私は……"，"私が忘れられないのは……" といったもので，それに続けて文章を完成するテストである。

3)



A　：もとになる confusion matrix

B, C：サイズの大きくなった confusion matrix

$$\max.\ \max H'_t = 2H'_x - \sum_i \sum_j \mathfrak{H}_x(i, j)$$

$$\mathfrak{H}_x(i, j) = -\sum_{\alpha_i} p(i, j, \alpha_i) \log p(i, j, \alpha_i)$$

引用文献

Asch, S.E. 1946 Forming impressions of personality. *J. abnorm. Soc. Psychol.*, **41**, 258-290.

Attneave, F. 1959 *Applications of information theory to psychology: A summary of basic concepts, methods, and results.* New York: Holt.

Bieri, J., Atkins, A. L., Briar, S., Leaman, R. L., Miller, H., & Tripodi, T. 1966 *Clinical and social judgement: The discrimination of behavioral information.* New York: John Wiley.

Clarke, F. R. 1960 Confidence ratings, second-choice responses, and confusion matrices in intelligibility tests. *J. Acoust. Soc. Amer.*, **32**, 35-46.

Garner, W. R., & Hake, H.W. 1951 The amount of information in absolute judgments. *Psychol. Rev.*, **58**, 446-459.

Indow, T., Sano, K., Namiki, H., & Makita, H. 1962 A mathematical model for interpretation in projective tests: An application to seiken SCT. *Jap. psychol. Res.*, **4**, 163-172.

Indow, T., & Sono, Sakiko (in press) The amount of transmitted information in confusion matrix. *Jap. psychol. Res.*

大橋正夫 1960 最近の Person Perception の研究 心研，**31**，243-256.

Quastler, H. (Ed.) 1955 *Information theory in psychology: Problems and methods.* Glencoe, Illinois: Free Press.

佐野勝男 1965 性格の診断 大日本図書

佐野勝男・槙田 仁 1960 精研式文章完成法テストの手引 金子書房

佐野勝男・槙田 仁・坂部先平 1960 パースナリティ・インベントリィの手引 金子書房

佐野勝男・槙田仁 1968 精研式文章完成法テスト事例集 成人男子用 金子書房

佐野勝男・槙田仁 1968 精研式文章完成法テスト事例集 成人女子用 金子書房

佐野勝男・曽野（小田）佐紀子 1966 他人のパーソナリティ把握における判断現象の分析——文章完成法テスト（SCT）を用いて——その 1 日本心理学会第30回大会発表論文集 p. 180.

曽野（小田）佐紀子・佐野勝男 1966 他人のパーソナリティ把握における判断現象の分析——文章完成法テスト（SCT）を用いて——その 2 日本心理学会第30回大会発表論文集 p. 181.

曽野佐紀子・佐野勝男 1969 他者のパーソナリティ把握における判断現象の分析（3） 変数として判断者のパーソナリティ（Diff., S, Z, E）を入れた場合 日本心理学会第33回大会発表論文集

曽野（小田）佐紀子 1966 Personality 把握に影響する「Differentiation 精神的分化」の要因について——SCT を刺激として用いた場合——慶応義塾大学修士論文（未発表）

Tagiuri, R., & Petrullo, L. (Eds.) 1958 *Person perception and interpersonal behavior.* Stanford: Stanford Univ. Press.

Witkin, H.A., Dyk, R.B., Faterson, H.F., Goodenough, D.R., & Karp, S.A. 1962 *Psychological differentiation.* New York: John Wiley.